

今を生きる：出会ったチャンスを生かすことの大切さ

(原文は英語)

早川 瑞希 (14 歳)

東京都

洗足学園中学校

「これまでに自分がやり遂げたことや最近一生懸命取り組んだことを自由に書いてください」。周囲に目をやると、どの子の鉛筆もすぐさま動き出している。私は焦った。自分は特別すごいわけではないからだ。何かとんでもないことをやり遂げたわけでもないし、他の子にない才能があるわけでもない。しかし、この時の私が知らなかったことがある。それは、生きることは運や才能がすべてではないということだ。挑戦や冒険に満ちた生き方をするのに必要なのは運や才能ばかりではない。私たちが成功と考えることを達成できるかどうか、そして、自分の生き方に満足していると言えるかどうかは、すべて私たち次第だ。才能に恵まれて生まれてくるかどうかを自分で決めることはできないが、生まれた後にどう生きるかは自分で決めることができる。私たちは生きているうちにとても多くのことができるが、それは自分から進んでそうしようと思えばのことだ。自分や周囲の人たちのためになるあらゆるチャンスを生かそうという気持ちがあつてこそだ。その気持ちを大切にすれば、結果的にずっと充実した、冒険に満ちた生き方ができるようになるだろう。

私がこのように考えるきっかけとなった、人生を変える経験は、ある友人との出会いだ。同い年の子で脳腫瘍があり、入退院を繰り返していたので何日も学校に来られなかった。しかし、いろいろなことにチャレンジするよう私たち全員にやる気を与えてくれる子だったので、クラスには欠かせないメンバーだった。演劇クラブのオーディションを誰か受けてみないかと言われたときに真っ先に手を挙げたのは彼女だった。担任の先生がチャリティマラソンのボランティアを探していたときに大喜びで参加したがったのも彼女だった。そうする理由を彼女は、あとどれくらい生きられるかわからないからだと言った。限られた時間の中でできるだけ多くのことにチャレンジしたい、そうすれば他の子たちが生きている間に経験できるのと同じくらいの経験を自分もできるからというのだ。しかし彼女が言ったことを考えると、それは彼女にだけ言えることではないと私は気づいた。むしろそれは誰にだって当てはまることだ。なぜなら誰にも明日死んでしまう可能性があるからだ。

チャンスはどこにでもころがっている。私たちは毎日必ず多くのチャンスに出会っている。そこでの違いは、それを生かすか、ただ突き放してしまうかだ。ある意味、人間との出会いに似ている。人間は世界中どこにでもいるが、関わり合いを持てるのは一握りだけだ。電車で誰かと出会っても、普通ならその人に会うことは二度とないだろう。チャンスもこれと同じだ。一つのチャンスに出会って

も、同じチャンスはもう二度とめぐって来ない。だからこそ少しでも自分や他の人たちの役に立ちそうな何かに出会ったら、それを生かそう。そうすれば、数え切れないほどの教訓や知識、経験が得られる可能性がある。チャンスを生かさなければその可能性はないだろう。

できるだけ多くのチャンスを生かすというのは難しいことだが、そうした経験から学んだことはたいてい、人生を変えるような教訓となる。何か新しいこと、これまでに経験したことのない何かに挑戦するのだから批判されることもあるだろう。やる気を失くして心がくじけることもあるだろう。しかし、そうした批判はさまざまな形で役に立つものだ。批判に対して強くなり、自分の弱点に気づき、批判を生かして成長することができる。新しいことに挑戦したからといって批判されるばかりではない。十分に経験を積めば、必ず成功が訪れる。自信がつき、さらに挑戦しようとやる気がわいてくる。その結果、前向きなサイクルが生まれ、もっと充実した生き方をしよう、もっと自分自身に満足しようと思えるようになる。

「あのボランティア活動に参加しておけばよかった」と後悔してみたり、「本当はあのクラブに入りたかった」と後で考えたりすることは誰にでもよくある。過去にしてしまったことは変えられない、後悔しても何も変わらない。しかし、これからすることは変えられるし、これから訪れるチャンスは進んで生かすことができる。私たちが日々出会うそうした小さなチャンスは、私たちの人生を変える力を持っている。そうしたチャンスを生かしていくことが、私たち全員が生きていく中で絶対に大切にすべきことだ。